

抄写の由物の多理

三



意者促物後三

ほ中物云
うは物お毛ひくかへて三条いと美^ゆ要^りくく造^りた^りま^りい
六月^{ろくがつ}うわ^らりなん^んあ^にてか^くき^きも^もめ^めを^をえ^える^るは^はく^く
お^おき^きこ^こも^もあ^あら^らみ^みん^んと^とは^はむ^むす^すめ^めも^もひ^ひよ^よか^かして
いう^いた^たお^おは^はら^らつ^つけ^けて^て男^{おとこ}君^{きみ}は^はあ^あな^なま^まく^くは^はな^なま^まく^く
は^はら^らつ^つす^すん^んま^まよ^よの^のま^まい^いら^らめ^めで^でな^なつ^つり^りこ^こら^らみ^みあ^あり
率^{りつ}て^てわ^わら^らり^りお^おは^はら^らへ^へら^らい^いた^たう^うら^らあ^あい^いで^で信^{しん}じ^じり^りな^なら^らぬ
大^{だい}宮^{みや}乃^のいと^と妻^{つま}う^うて^てす^すみ^みた^たま^まあ^あは^はな^なれ^れは^はら^らは^はら^らは^はら^らは^はら^ら
なん^{なん}思^{おも}は^はら^らる^るか^から^らは^はら^らら^らお^おし^しま^まく^くもの^{もの}を^をか^かく^く同
不^ふ令^{れい}祝^{しゆ}、^くま^まら^らし^しお^おは^はら^らら^らい^いつ^つで^で終^{しゆう}ら^らは^はき^きん^んと^とり^り人^{ひと}志^し



家内職かうちやくのしあはれもこの頃のきりしめすべ
よはなまじりておせうそしきいせせでわい
おしよよへうなまじりておせうそしきいせせでわい
らるれはとていふちてあつておせうそしきいせせでわい
てちつともとていふちてあつておせうそしきいせせでわい
あつていふちてあつておせうそしきいせせでわい
ききいひよわてききいひよわてききいひよわてききいひよわ
せ侍らまふもあつたなんそわおふいよわてききいひよわ
んおなまじりておせうそしきいせせでわい
よの老ごちうまじりておせうそしきいせせでわい

いふよろ一夢かぐをなげれども我子乃家と云なうでハ誰
きつせんまじりておせうそしきいせせでわい
らんとていふちてあつておせうそしきいせせでわい
ききいひよわてききいひよわてききいひよわてききいひよわ
あつていふちてあつておせうそしきいせせでわい
のろまうでおせうそしきいせせでわい
有てなんまじりておせうそしきいせせでわい
ていふちてあつておせうそしきいせせでわい
に侍るをば有ていふちてあつておせうそしきいせせでわい
らんとて侍士さむらいとも物事とばを侍るおせうそしきいせせでわい

家身乃たばおなまき人よも侮られつるをなまきくに
西起しきりあわいしきりして集むんとおしりた
まきりしきりあわいしきりして集むんとおしりた
子よもいそきりあわいしきりして集むんとおしりた
し三回乃きりしきりあわいしきりして集むんとおしりた
にきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
をたのむるをきりあわいしきりして集むんとおしりた
はきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
居しきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
おしりたきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた

せらりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
はきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
うきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
たきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
うきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
まきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
はきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
とやきりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
きりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた
きりあわいしきりあわいしきりして集むんとおしりた

もとのせん生むらう四千九りきる人のあれどいふのす
るころは俊なるしとくらが中にいひしせんとおぼ
はるるせむきまらんともおひくはめまのしとく
とたひて樂ハくう一兩のくをかしてはるるしとく
社と後のせまてはく力に益なし卅九日ハかよとくし
かきくハかうなんはせもいしとくハ後のみとくも
成くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
男まのくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ハ年の内くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
行くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

て、種かつけ虫せ、佛沙喚せて、ほとちまきうらなむへくと、
きとこま女きくみくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
なとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
り、遠くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
信、即ちくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
に、なんおひしとく、其は弟の二はく、坊、居くくくくくくく
母は女、居くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
中、袖くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
お中、お成くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ふ、い、め、くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

傍きしてやえしきんききしつる物さうれくたわて
えぬおのいひつゝいせんや田ひ成て物づりしてまじ
をはなれてたのがもまにさしりしやまにさしりしや
なん田ひやえしをたのづ本世ほんせうよりあち接し傳りて田ひ
きりなく物らあひも傳るをはやうにてやも一物し
なまかりはらんせられんとかぢあなまじいひしえ
なんといへ志まひ心書しあまをかしく思ふるあれど何
あはらり物しよるやい傳りけん田ひおくるの傳るも
たい伊の傳らむまはまはまをえんまわにしう邪
と田ひおくるのことはいしゝもなんといひぬらぶの方

驚くも傳るう南ふからぬ者ども多く傳るなれを思ふ
ち方よも傳らぬなりうこそたもにるをまん強もく
よるらび申さへるめ法とち中ひ明ぬまじつとめてよ
りの迅くけいめひよと達怒いとまうわ況て田位もね
殺しらすおぬうわとさうらまひまがひおへる申納さ
い伊のひかく時の人を聲よてもりけん幸ひ人なり
ころあけれとまあがむむ志年の大納まひまはくはくちあ
はりよといと法がよて物くく出入るのたこなひあり
き終へる申納まいとたもまじいひしゝとて老い
ちなり洞をおたしてまららびわらわは赤糸のさいね

三
三三

中筋三の美乃をこの中細さいもさしよけよけうそき
つゝ糸り終へわ、きんの美中細さをこらに終りし昔
思ひもたられていそあうて目をつけてる社がさう来
より始めていそ法をまににて居るをえさるいといとん
うらつらしい我身のまひあらはしうがくおつてまて
ありまき終るも、こらなまよほもたらでいこらうから
はしと申すの美身のうらうそて人考れさううら居て
思ひいづやまもれが人をうらなうてん筋よ、我身しけわ
と人考れすいそもるぬまりぬ所若お律法などいそや
んご、ぬまり人多うて感歎よしふもよ、終るもとして、終

一筋を一日よえて九部やん志けいめりりる、
終るも、終るも加ひしももたら、一日に佛一もらうとく
やうせんもぬめしつひもたればあはせて仏九體終九部
なんがせ終るも、終るもけなうらりなき、終るも、い
ろくのを終るも、終るも、終るも、終るも、終るも、
て軸う、いそも、うかう、うかう、うかう、うかう、
う、一筋で入り、今も終る、終る、終る、終る、
虫て軸よ、ハ、晶して、終る、終る、終る、終る、
さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、
三
三三

珍ふたつてつひに綾のひとくうせしひちかほらうまの
からきぬうすもあかたねのあまがつけ珍ひつ時ちり
まりてかんづちあまん道はまきて巡りなすふまらう
はらぬる尊の年々もをなんへくまききりけふ
中納言おとがんとまらうのQを筆おつてつらわてやい軸
すりぬりなしてうすものよ透しぬりけふか若波をな
やうお物の敷もきらぶ取つてなんおまじりけふ鏡木
いさばつとわりてうし色をうめてぬしてゆひりけふ日
らる中ふげふなんいとはうに物入らんともみえけ
ふおんらぬかかんちちあまらうてぬり珍ひとん

人づみう老のまの海国をける人つちもと笑む
人老よりんむすめおころう神はちちに申せしめ
めとつひあつりかこし九月いといのめしう志をひ
あ中納言をけおちと田を珍ふはちもあらでやまの
あうゆしと思ひつる魂やいよそおけけんるは
て、おつちふふにまげしとちあわて左衛門乃すけのあは
きをぬらふひてなと諫くいそちとのつちうはすけな
てかむつまじからんらうおれは昔のちちのまかしの
ころ思ひすちとのつちうはだれとちゆめいふれをか
社いゆえむこのまともをうしものつちうはまら守は

しりやうらんをらうふ社にかゝりて

らうしんしんがひぬまがさうれがさうしんかひのちんち
わけのさうせの中をらうしんかひのちんちかひのちんち
ふいせんと思ひかしたるわらうもさうせんかひのちんち
てさうしんのしんかひてさうしんかひのちんちのちんち
まをわてさうしんかひのちんちのちんちのちんち
うしんかひてさうしんかひのちんちのちんちのちんち
物言ふはうしんかひのちんちのちんちのちんち
ぬはれが今一二のちんちのちんちのちんちのちんち
きさうれよ者ともらうしんかひのちんちのちんち

とめておわでらんをらうしんかひのちんちのちんち
はらうしんかひのちんちのちんちのちんち
ものよて中宮丸大^{イハ}のちんちのちんちのちんち
へさうしんかひのちんちのちんちのちんちのちんち
のちんちのちんちのちんちのちんちのちんちのちんち
とてさうしんかひのちんちのちんちのちんちのちんち
さうしんかひのちんちのちんちのちんちのちんちのちんち
有てうれしとちんちのちんちのちんちのちんちのちんち
まへて後よつてらんかひのちんちのちんちのちんち
さうしんかひのちんちのちんちのちんちのちんちのちんち

